

いわゆる物語類は、様々なジャンルの作品に収納され現代に至っているが、物語そのものは初めから収められるジャンルが定められていたわけではない。『ジャータカ』と『パンチャタントラ』に同じ物語が見られるのも、民話として語り継がれていたものを、それぞれの作品の編者が織り込んだものにほかならない。ジャイナ文献群においても、聖典、非聖典、実に多様なジャンルの作品に物語りは収納されている。

二大叙事詩のジャイナ版も広く伝承されたが、ラーマ物語のそれにはジャイナの教義は前面には出ていないという研究がある。ブリハット・カタール系の『ヴァスデーヴァヒンディ』やパンチャタントラ系のプールナバドラ版は、それぞれの説話集伝承に大きな役割を担ったが、とりわけ後者のポピュラリティーの根拠たる普遍性をテイラーが列挙している。そのテキストのなかに、ジャイナたちの宣教の意図は窺えない。語りに徹しているのである。

『獅子座三十二話』別名『ヴィク라마チャリタ』も4系統の伝承のうちひとつはジャイナが担った。すべての系統にわたって精緻なテキスト校訂をおこなったエジャトンの研究を参照しつつ、枠物語のプロット構成をジャイナ版とその他を代表する南方版を比較すると、ジャイナ版にのみ付加されている3つのプロット以外は、概ね大差ないが、ヴィク라마王のジャイナ教への改宗が語られるプロットにのみジャイナ色が濃く現れていた。ここに編者の主張を認めることができるが、物語におけるジャイナ改宗モチーフについて精緻な研究をしたフリーゲルによれば、ジャイナの語りはたとえ主人公のジャイナ教改宗が描かれていても、直接的な宣教を意図したわけではなく、聴衆の心に種を植え付けただけだという。聴衆だった人が実生活において苦難に遭遇したとき自己洞察という滋養によって克己という発芽にいたればよしとするが、ジャイナの考えだったようである。タミル文学でも、ジャイナらしくないものがジャイナによる作品であるケースがあると紹介されている。

現代の、ポトゥア、ボーパ、マーンガニヤールなどは、自らはイスラームでありながらヒन्दゥーをパトロンとすることも多いのは、それが彼らの生業だからだろう。洋の東西を問わず、「語り」が商いと密接な関係にあったことを思うと、ジャイナが語りに徹する理由が浮かび上がってくる。